

【資料】

酪農学園大学野生動物医学センター（WAMC）における傷病鳥獸救護の記録（2011–2014年度）

古瀬 歩美¹⁾ 牛山 喜偉¹⁾ 平山 琢朗^{1,2)} 吉野 智生^{1,3)} 浅川 满彦¹⁾

1) 酪農学園大学獣医学類（〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582）

2) アンドレ動物病院（〒320-0862 栃木県宇都宮市西原3-9-9）

3) 釧路市動物園（〒085-0201 北海道釧路市阿寒町下仁々志別11）

酪農学園大学野生動物医学センター（WAMC）は、2004年4月に文部科学省ハイテク研究の助成を受けて設立された。野生動物、動物園で飼養されている動物およびエキゾチックペットにおける感染病原体と環境汚染物質の保有状況の把握、およびそれぞれの個体に関する基礎的情報の収集・分析を行っている^[1-3]。野生鳥獸の救護活動は、2003年より酪農学園大学寄生虫学教室（野生動物学）内で始まり、WAMC開設後は同センターに活動が引き継がれた。2003年度から2010年度の救護活動については、吉野ら^[4]の報告がある。今回、2011年度から2014年度に救護した傷病鳥獸の動物種や保護要因等について分析した結果を報告する。

2011年4月から2014年度7月までにWAMCへ生きた状態で持ち込まれた傷病鳥獸の記録（救護カルテおよび剖検記録）を材料とした。救護カルテから、動物種名、保護地点などの基本情報および収容後の経過・予後について抽出した。また、斃死あるいは安楽殺された個体について、剖検記録から保護要因や死因の分析結果を収集した。なお、これらの情報については、本施設の2003年度から2010年度の記録（吉野ら^[4]）と比較した。

2003年度から2010年度に保護・収容された傷病鳥獸は、鳥類55例、12例の計67例で、鳥類が全体の82%であつ

た^[4]。一方、2011年度から2014年度のおよそ4年間に保護・収容された傷病鳥獸は、鳥類35例および哺乳類4例の計39例で（表1、図1）、鳥類が全体の9割を占めていた（図2）。なお、2012年度は、年度途中から救護動物の受け入れを一時停止したため、例外的に3例のみの保護であった。搬入者は学生、市民、自治体のいずれかであった。保護動物の内訳は、鳥類7目13科19種およ

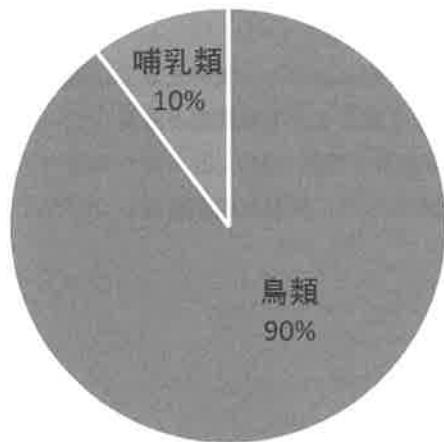


図2 保護動物内訳（2011–2014年度）

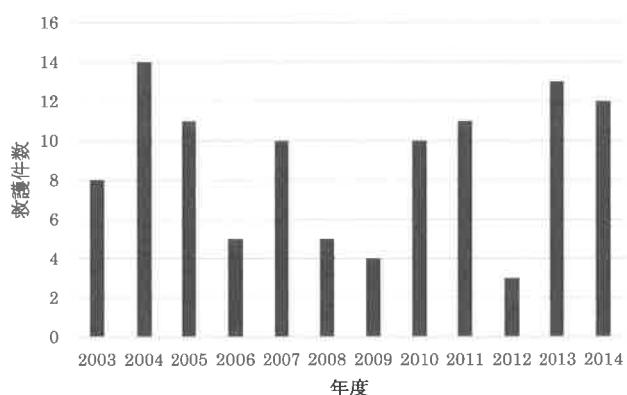


図1 年度別救護件数

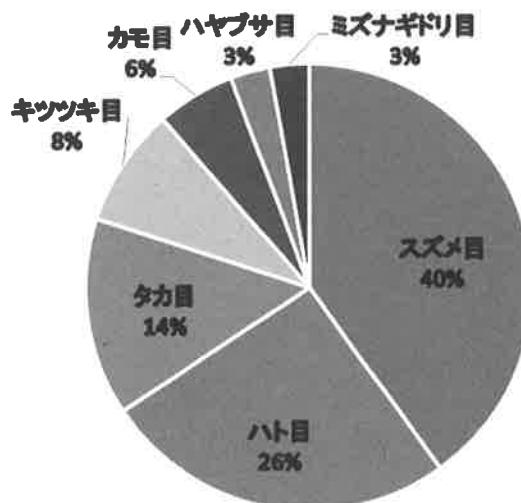


図3 救護鳥類の目別内訳（2011–2014年度）

表1 救護個体一覧

| AS(登録番号) | 目 | 科 | 種 | 齢 | 性 | 年 | 月 | 保護要因 | 経過 | 主症状 | 保護地点 | 周辺環境 | 保護地点 |
|----------|--------|---------|-----------|----|----|------|----|---------|------|-----------|---------|------|------|
| 11688 | キツツキ | キツツキ | アカゲラ | 成鳥 | オス | 2011 | 7 | 衝突 | 放鳥 | 脳震盪 | 江別市対雁 | 市街地 | 江別市 |
| 11689 | スズメ | アトリ | カワラヒワ | 成鳥 | 不明 | 2011 | 7 | 衝突 | 放鳥 | 脳震盪 | 江別市大麻 | 市街地 | 江別市 |
| 11693 | スズメ | カラス | ハシブトガラス | 成鳥 | 不明 | 2011 | 7 | 衝突 | 死亡 | 脚の脱力 | 江別市大麻 | 農場 | 江別市 |
| 11705 | スズメ | ゴジュウカラ | ゴジュウカラ | 成鳥 | 不明 | 2011 | 7 | 衝突 | 死亡 | 衰弱 | 江別市野幌 | 市街地 | 江別市 |
| 11887 | タカ | タカ | トビ | 成鳥 | 不明 | 2011 | 9 | 捕食・補殺 | 放鳥 | 翼脱力 | 江別市内 | 農場 | 江別市 |
| 11248 | ハト | ハト | ドバト | 成鳥 | 不明 | 2011 | 11 | 捕食・補殺 | 引き取り | 外傷(翼、脚、眼) | 江別市大麻 | 市街地 | 江別市 |
| 11428 | ハト | ハト | ドバト | 成鳥 | 不明 | 2011 | 12 | 捕獲 | 放鳥 | — | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 11430 | ハト | ハト | ドバト | 成鳥 | 不明 | 2011 | 12 | 捕獲 | 放鳥 | — | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 11429 | ハト | ハト | ドバト | 成鳥 | 不明 | 2011 | 12 | 捕獲 | 放鳥 | — | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 12113 | タカ | タカ | トビ | 成鳥 | 不明 | 2012 | 2 | 衰弱 | 放鳥 | 衰弱 | 札幌市厚別区 | 市街地 | 札幌市 |
| 12174 | ミズナギドリ | ウミツバメ | ハイイロウミツバメ | 成鳥 | 不明 | 2012 | 3 | 不明 | 死亡 | 衰弱 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 12550 | スズメ | カラス | ハシボソガラス | 幼鳥 | 不明 | 2012 | 7 | 衝突 | 死亡 | 脚の脱力、開口呼吸 | 岩見沢市春日町 | 市街地 | 岩見沢市 |
| 12750 | スズメ | メボソムシクイ | センダイムシクイ | 成鳥 | 不明 | 2012 | 8 | 衝突 | 死亡 | 脚の脱力、開口呼吸 | 江別市大麻 | 市街地 | 江別市 |
| 12855 | カモ | カモ | マガモ | 成鳥 | メス | 2012 | 10 | 交通事故 | 死亡 | 衰弱、姿勢異常 | 札幌市白石区 | 市街地 | 札幌市 |
| 13317 | ハト | ハト | ドバト | 成鳥 | 不明 | 2013 | 4 | 衰弱 | 引き取り | 下痢 | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 13318 | スズメ | スズメ | スズメ | 成鳥 | 不明 | 2013 | 4 | 粘着ネズミ捕り | 安楽死 | 脱羽 | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 13319 | スズメ | スズメ | スズメ | 成鳥 | 不明 | 2013 | 4 | 粘着ネズミ捕り | 安楽死 | 脱羽 | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 13875 | キツツキ | キツツキ | アカゲラ | 成鳥 | オス | 2013 | 6 | 衝突 | 死亡 | 翼骨折、裂創 | 札幌市平岡 | 市街地 | 札幌市 |
| 13915 | キツツキ | キツツキ | アカゲラ | 幼鳥 | 不明 | 2013 | 7 | 誤認保護 | 放鳥 | — | 江別市野幌 | 市街地 | 江別市 |
| 14146 | スズメ | ヒヨドリ | ヒヨドリ | 幼鳥 | 不明 | 2013 | 8 | 衝突 | 安楽死 | 脚骨折 | 札幌市厚別区 | 市街地 | 札幌市 |
| 13944 | スズメ | コマドリ | コマドリ | 成鳥 | メス | 2013 | 8 | 衝突 | 死亡 | 鳥口骨骨折 | 江別市野幌 | 市街地 | 江別市 |
| 14024 | ハト | ハト | キジバト | 成鳥 | 不明 | 2013 | 11 | 衝突 | 安楽死 | 翼脱力 | 江別市大麻 | 市街地 | 江別市 |
| 14371 | タカ | タカ | ノスリ | 成鳥 | 不明 | 2013 | 11 | 衰弱 | 放鳥 | 衰弱 | 江別市本江別 | 市街地 | 江別市 |
| 14372 | ハト | ハト | ドバト | 幼鳥 | 不明 | 2013 | 11 | 衝突 | 安楽死 | 翼脱力 | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 14727 | ハト | ハト | ドバト | 成鳥 | 不明 | 2014 | 3 | 草刈り機 | 引き取り | 外傷 | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 14734 | スズメ | アトリ | イスカ | 成鳥 | 雄 | 2014 | 3 | 衝突 | 放鳥 | 頭部出血、姿勢異常 | 不明 | 市街地 | 不明 |
| 14735 | カモ | カモ | コハクチョウ | 成鳥 | 不明 | 2014 | 4 | 感電 | 放鳥 | 翼裂創、脚の脱力 | 江別市 | 農地 | 江別市 |
| 14736 | タカ | タカ | トビ | 成鳥 | オス | 2014 | 4 | 衰弱 | 放鳥 | 削瘦 | 江別市野幌 | 市街地 | 江別市 |
| 14961 | スズメ | スズメ | スズメ | 成鳥 | オス | 2014 | 6 | 衝突 | 死亡 | 肺出血、骨折 | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 15014 | スズメ | スズメ | ニュウナイスズメ | 幼鳥 | メス | 2014 | 6 | 誤認保護 | 放鳥 | — | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 15015 | スズメ | スズメ | ニュウナイスズメ | 幼鳥 | メス | 2014 | 6 | 誤認保護 | 放鳥 | — | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 15197 | ハト | ハト | ドバト | 幼鳥 | メス | 2014 | 8 | 交通事故 | 安楽死 | 翼骨折 | 札幌市北区 | 市街地 | 札幌市 |
| 15332 | ハヤブサ | ハヤブサ | チゴハヤブサ | 成鳥 | 不明 | 2014 | 9 | 衝突 | 放鳥 | 削瘦 | 江別市大麻 | 市街地 | 江別市 |
| 15214 | スズメ | カラス | ハシブトガラス | 成鳥 | オス | 2014 | 10 | 捕食・補殺 | 安楽死 | 眼球損傷 | 江別市大麻 | 農地 | 江別市 |
| 15344 | タカ | タカ | トビ | 成鳥 | 不明 | 2014 | 9 | 不明 | 引き取り | 翼骨折 | 札幌市 | 不明 | 札幌市 |
| AS(登録番号) | 目 | 科 | 種 | 齢 | 性 | 年 | 月 | 保護要因 | 経過 | 主症状 | 保護地点 | 周辺環境 | 保護地点 |
| 13974 | 偶蹄 | シカ | エゾシカ | 幼獣 | メス | 2013 | 6 | 交通事故 | 安楽死 | 外傷(脚) | 江別市角山 | 農地 | 江別市 |
| 14874 | ウサギ | ノウサギ | エゾユキウサギ | 幼獣 | メス | 2014 | 4 | 草刈り機 | 死亡 | 外傷(脚) | 南幌町 | 農地 | 南幌町 |
| 14875 | ウサギ | ノウサギ | エゾユキウサギ | 幼獣 | オス | 2014 | 4 | 草刈り機 | 放獣 | — | 南幌町 | 農地 | 南幌町 |
| 14912 | コウモリ | ヒナコウモリ | コテングコウモリ | 成獣 | 不明 | 2014 | 5 | 衰弱 | 放獣 | — | 長沼町 | 農地 | 長沼町 |

表2 救護鳥類の分類 (2011–2014年度)

| | | |
|---------|----------|-----------------------|
| スズメ目 | アトリ科 | カワラヒワ(1) イスカ(1) |
| | カラス科 | ハシブトガラス(2) ハシボソガラス(1) |
| | ゴジュウカラ科 | ゴジュウカラ(1) |
| | コマドリ科 | コマドリ(1) |
| | スズメ科 | スズメ(3) ニュウナイスズメ(1) |
| | ヒヨドリ科 | ヒヨドリ(1) |
| | メボソムシクイ科 | センダイムシクイ(1) |
| ハト目 | ハト科 | ドバト(8) キジバト(1) |
| タカ目 | タカ科 | トビ(4) ノスリ(1) |
| キツツキ目 | キツツキ科 | アカゲラ(3) |
| カモ目 | カモ科 | マガモ(1) コハクチョウ(1) |
| ハヤブサ目 | ハヤブサ科 | チゴハヤブサ(1) |
| ミズナギドリ目 | ウミツバメ科 | ハイイロウミツバメ(1) |

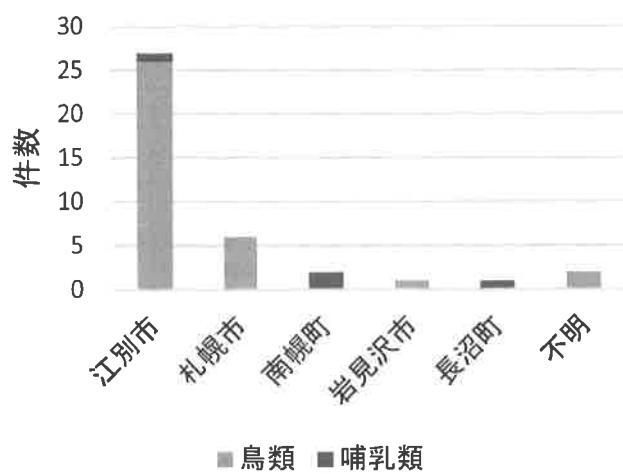


図4 地域別保護件数内訳（2011～2014年度）

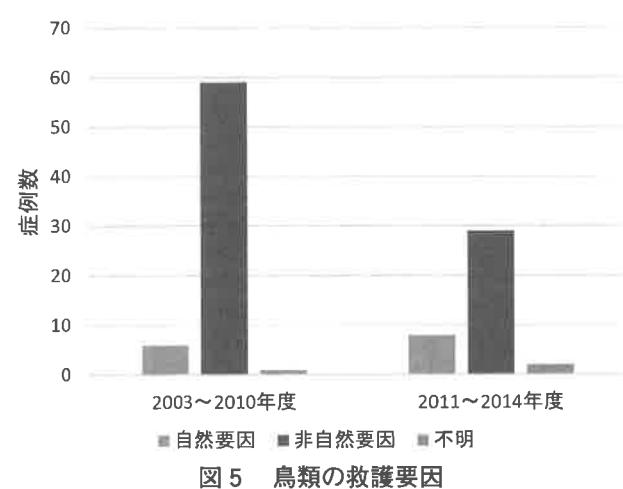


図5 鳥類の救護要因

表3 救護要因内訳

| | 鳥類 | 哺乳類 |
|---------|----|-----|
| 自然要因 | 7 | 1 |
| 衰弱 | 4 | 1 |
| 捕食・捕殺 | 3 | 0 |
| 非自然要因 | 26 | 3 |
| 衝突 | 14 | 0 |
| 誤認保護 | 3 | 0 |
| 粘着ネズミ捕り | 2 | 0 |
| 捕獲 | 3 | 0 |
| 交通事故 | 2 | 1 |
| 草刈機 | 1 | 2 |
| 感電 | 1 | 0 |
| 不明 | 2 | 0 |

び哺乳類3目3科3種であった。鳥類のなかでは、スズメ目、ハト目およびタカ目の保護事例が多く（図3）、最も多く持ち込まれた種はドバト（8例）で、次いでトビ（4例）、アカゲラ（3例）、スズメ（3例）等であった（表2）。今回検討の対象とした動物には、希少種は含まれていなかった。これら動物は、外来種であるドバ

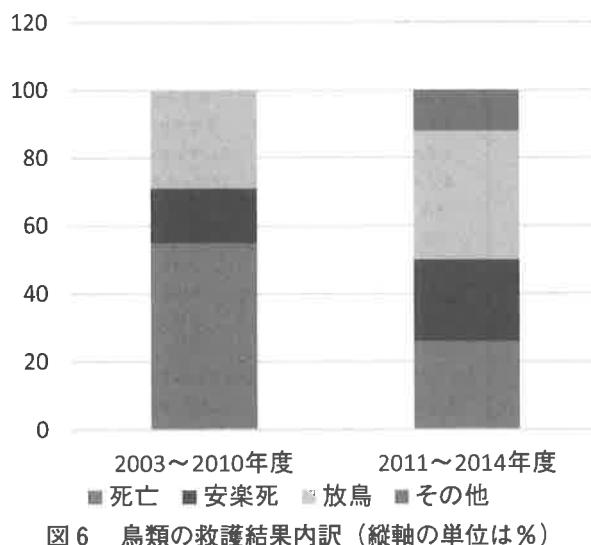


図6 鳥類の救護結果内訳（縦軸の単位は%）

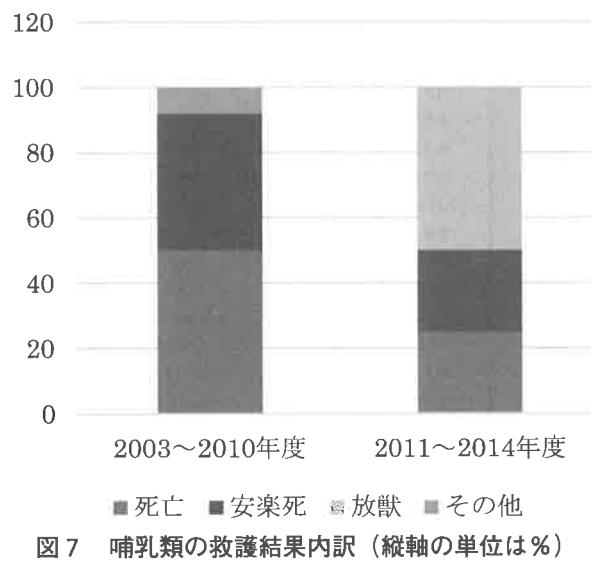


図7 哺乳類の救護結果内訳（縦軸の単位は%）

ト、それぞれ狩猟対象の鳥獣であるスズメ、ニュウナイスズメ、ヒヨドリ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、キジバト、マガモ、ユキウサギ、エゾシカ、あわせて10種で約半数（56%）を占めた。

保護地点は大学の所在地である江別市内での保護事例が26例と最も多く、札幌市で6例、南幌町など隣接する市町での保護事例が1～2例あった（図4）。対象動物が保護された地点として、住宅地や森林そばの建造物、農地にある道路などが多く、それらでは事故による受傷動物が多い傾向にあった。鳥類における救護の要因は、非自然要因が圧倒的に多かった（図5）。建造物への衝突によるものが最も多く（14例）、次いで栄養失調等による衰弱（4例）、ヒナの誤認保護（3例）、駆除目的の捕獲（3例）などであった（表3）。収容された傷病鳥獣は、必要に応じて応急処置および治療を行い、回復したものはリハビリ後に保護場所付近で放野した。予後不良

と判断されたものは、人道的観点から麻酔薬等を用いた安楽死処置を行った。衝突によって保護された鳥類の予後は、骨折や臓器損傷によって死亡または安楽殺処置となつたものが多く（10例）、脳震盪など軽い症状であったものが放鳥された（3例）。2011年度から2014年度に保護された鳥類の救護後の予後は、放鳥されたものが42%、安楽殺処置が19%、斃死が29%であった（図6）。

救護の対象となった哺乳類は4例で、そのうち3例が幼獣であった。救護の要因は、交通事故や草刈機など人為的事故によるものであった。これまでWAMCでの哺乳類の放獣例は過去になかったが、2014年4月、初めて放獣できたもの（登録番号AS14875：ユキウサギ）を経験した。2011年度から2014年度に救護された哺乳類の予後は、放獣されたものが50%、安楽殺処理が25%、斃死したものが25%であった（図7）。

2011年度から2014年度に取り扱った傷病鳥獣は、鳥類が9割を占め、これは2003年度から2010年度の報告の割合と同様であった。鳥類ではスズメ目、ハト目、タカ目が全体の8割を占め、カモ目などの水鳥や海鳥は少なかった。これは、江別市が内陸にあり、野幌森林公園などの森林に囲まれていることを反映していると考えられた。

2011年度から2014年度の年間平均保護件数は、2003年度から2010年度と比較して1.4件上昇したが、目立って件数が増加した年度はなかった。保護地点は江別市を中心とする地域に限定されていたことから、WAMCにおける救護件数は、江別市周辺の環境変化や、人間の活動の影響を反映すると考えられた。活動の継続による地域的な環境モニタリングへの寄与が期待された。

救護要因は、2003年度から2010年度と同様に非自然要因が圧倒的に多く、鳥類ではそのほとんどが建造物との衝突であることも変わらなかった。酪農学園大学構内での衝突に関して、吉野ら^[4]は、建造物と森林が近いこと、大学構内の建造物においてバードセーバーの貼付やカーテンを閉めるなどの対策がほとんどとられていないことを挙げているが、今回の検討においても状況に大きな変化はないものと考えられた。今後、鳥類の衝突に関して救護場所や見取り図など詳細な情報を収集することで、有効な資料を作成し、対策を講じていく必要がある。

2011年度から2014年度は2003年度から2010年度と比較して、死亡の割合が29%低下し、放鳥の割合は9%上昇した。これは、搬入時の状態が良い、あるいは無傷のものが多かったこと（駆除目的の捕獲AS11248～11429：

ドバト、誤認保護 AS15014、15015：ニュウナイスズメ）によるものと考えられた。また、その他の転帰として、レース鳩の引き取り（AS11248、AS13317：ドバト）や、転院（AS15344：トビ）が今回新たな事項であった。外部機関との連絡や連携を積極的に行うことでの今後放鳥や安楽殺以外の転帰が増えると予想された。

野生動物救護活動には、傷ついた野生動物を救護するという人道的な行為と生物多様性の保全という公益的な行為の二面性を適切に調和させることが求められている^[5]。今回検討の対象とした鳥獣に希少種はなかった。また、外来種であるドバトや、狩猟鳥獣の保護・収容が約半数だったことから、現在のWAMCの救護活動に公益性があるとは言いがたい。しかし同時に、市民からこのような傷ついた外来種や狩猟対象種への対応を求められていることも事実である。今後は、外来種や狩猟対象種への対応や方針を定める必要がある。また、救護鳥獣を環境教育・啓蒙目的で活用するためのより多くの手段も検討するべきであろう。

今回の調査から、救護記録を確実・的確に記録し、整理していくことで、生態系保全対策のために有効な資料を作成できることが分かった。また、行政、救護施設、民間の連携を深め、外来種や狩猟対象種、環境教育の分野で一致した対応を行うことが望まれた。

参考文献

- [1] 浅川満彦、谷山弘行：獣医師会・行政組織・大学・研究機関との連携による調査体制と酪農学園大学野生動物医学センターの役割、北獣会誌、48、424-429（2004）
- [2] 浅川満彦：2007年以降における酪農学園大学野生動物医学センターを拠点として実施された北海道産アライグマにおける感染病原体の疫学調査概要、野生動物医学会ニュースレター、35、12-14（2012）
- [3] 平山琢朗、棚田敦司、浅川満彦：北海道江別市内で発見されたコバシギンザンマシコ *Pinicola enucleator kamtschatkensis* 個体死体の剖検記録、北獣会誌、57、475-476（2013）
- [4] 吉野智生、上村純平、渡邊秀明、相澤空見子、遠藤大二、長 雄一、浅川満彦：酪農学園大学野生動物医学センター WAMC における傷病鳥獣救護の記録（2003年度～2010年度）、北獣会誌、58、123-129（2014）
- [5] 野生動物救護のあり方（日本獣医師会野生動物委員会報告）、6-8、日本獣医師会、東京（2005）